

P6 富山湾の鯨類の記録(2007年)

○南部久男(富山市科学博物館), 山田格(国立科学博物館), 石川創(日本鯨類研究所), 台藏正一(あすなろ目高文庫), 関東雄

Stranding records of cetaceans from the coasts of Toyama Prefecture, Toyama Bay, 2007

Hisao Nambu (Toyama Science Museum), Tadasu K. Yamada (National Museum of Nature and Science), Hajime Ishikawa (Institute of Cetacean Research), Masakazu Daizo (Asnaromedaka-bunko), Haruo Seki

【緒論】富山湾の鯨類相については、演者らの継続的なストランディング等によりデータが収集されている。今回、2007年の富山湾における鯨類のストランディングを報告し、合わせて過去の記録について考察する。

【結果・考察】

① 2007年のストランディング

2007年は富山湾で2件2頭のストランディングがあった。

- ・ハナゴンドウ *Grampus griseus* (マイルカ科)

6月17日, 氷見市仏生寺川下流, 体長201.5cm (オス)

- ・イシイルカ *Phocoenoides dalli* (ネズミイルカ科)

5月17日, 氷見市泊, オス

② 過去の記録 (1991年~2007年)

2001~2007年のストランディング, 1991~2004年の目撃記録等(南部他,2002~2007; 関他,2005)によれば, 富山湾では3科7種31件のストランディング又は目撃記録があった。カマイルカが最も多く, 1998~2006年に7件7個体のストランディング, 9件の群の目撃があり, 10件が富山湾の西側, 6件が東側の記録である。月別では2月1件, 4月6件, 5月9件である。ツチクジラ *Berardius bairdi* は1991~2002年に5件の群の目撃があり, 西側4件, 東側1件で, 月別では, 6月3件, 5月2件であった。ハンドウイルカ *Tursiops truncatus* は2000, 2001年に2件の群の目撃, 1件1個体のストランディングがあり, 3件とも西側であった。ハナゴンドウは2004, 2006, 2007年に3件3個体のストランディングがあり, 西側2件, 東側1件で, 3件とも6月であった。ミンククジラ *Balaenoptera acutorostrata* は, 2001年10月と2003年12月にそれぞれ1件1頭あり, 2件とも西側であった。記録が少ないのは, 今回のイシイルカとハセイルカ *Delphinus sp.*(2004年5月に東側で1件1個体)である。

1991年以降の記録より, 富山湾奥部へ来遊が多いイルカはカマイルカで, 主に4, 5月に来遊すると考えられる。ハンドウイルカは2月頃に, ハナゴンドウは6月頃に来遊する可能性がある。ツチクジラは6, 7月に富山湾の西側を中心に来遊していると思われる。

P7 平成 19 年度宮崎県で実施した埋設くじら骨格発掘の

3 例について

○栗田 壽男（宮崎くじら研究会）、末吉 豊文（宮崎県総合博物館）

A report on three case cetacean skeletons dug up in Miyazaki Prefecture in 2007

Toshio Kurita (Miyazaki Cetacean Work Group) and Toyofumi Sueyoshi (Miyazaki Prefectural Museum of Nature and History)

【はじめに】

宮崎くじら研究会は、県単独事業、平成 19 年度 NPO パートナシップ創造事業により、本県にストランディングしたクジラ類、3 種 3 頭の骨格を発掘したので報告する。

【日時・場所・方法】

日時：平成 19 年（2007 年）9 月 29 日～平成 20 年 2 月 27 日

場所：①宮崎市青島町白浜 カズハゴンドウ 1 頭（埋設年月日：平成 18 年 5 月 28 日

②日南市平山海岸 コブハクジラ 1 頭（埋設年月日：平成 17 年 8 月 5 日）

③日向市美々津海岸 オオギハクジラ 1 頭（埋設年月日：平成 14 年 9 月 2 日）

方法：宮崎市青島（カズハゴンドウ）、日南市平山（コブハクジラ）は人力で、日向市美々津（オオギハクジラ）は重機械を使用した。

【結果及び考察】

- ① カズハゴンドウは、埋設後 1 年 3 ヶ月経過で周辺地形の変化はなく、埋設位置の写真が多かったこと、人工構造物の近辺で浅く埋設されたことから容易に掘り出し、ほぼ全身骨格を収容することができた。発掘に要した直接経費は 35,179 円であった。
- ② コブハクジラは、埋設日時から 2 年 2 ヶ月経過で、埋設箇所の地形が変化していたこと（砂の堆積）、埋設が深かったこと、周辺の護岸工事が進み重機材の搬入経路がなくなっていたことから掘り出しは全て人力で実施した。ほぼ全身骨格を収容できた。発掘に要した直接経費は 328,849 円であった。
- ③ オウギハクジラは、埋設から約 5 年経過し、埋設付近の地形が大きく変化したこと、埋設時の写真が少なかったこと、埋設周辺の土砂が転石、礫であったため掘り出しを重機械に依存し過ぎ、重機械が骨格を直接掘ってしまったことから尾椎骨、上腕骨、頸骨、頭骨の一部、歯等の採集にとどまった。発掘に要した直接経費は 315,588 円であった。

【今後の課題】

クジラ埋設に当って、埋設後の周囲の風景写真、浅い埋設、埋設時に標識等の埋め込みなど行うことが重要である。

P8 漂着専門委員会報告：日本沿岸のストランディングレコード 2007

石川創（〔財〕日本鯨類研究所）, [○]田島木綿子・山田格（国立科学博物館）, 蛭田密（Aquatic Animal Consulting）, 小原王明（ウインズオフィスコーディネート）

Stranding records in Japan 2007

Hajime Ishikawa (Institute of Cetacean Research), Yuko Tajima (National Museum of Nature and Science, Tadasu K. Yamada (ditto), Hisoka Hiruda (Aquatic Animal Consulting), and Kimiaki Kohara (Wingz Office Coodinate)

日本セトロロジー研究会漂着専門委員会は、日本鯨類研究所及び国立科学博物館が全国のボランティア、地域ネットワーク、報道記事などから収集したストランディングレコードを、漂着委員会報告として毎年集計発表している。日本鯨類研究所ストランディングデータベース 080527 に登録された 2007 年のストランディングレコード 408 件（混獲・目視情報・海外情報を含む）から、日本沿岸における海産哺乳類の漂着、迷入記録を抽出した。鯨類は 211 件、鰭脚類は 16 件で、記録された種はヒゲクジラ類が 5 種 17 件 17 頭、ハクジラ類が 20 種 178 件 181 頭、鰭脚類が 6 種 16 件 16 頭であった。最も多かった種はヒゲクジラ類がミンククジラ(12 件)、ハクジラ類はスナメリ(83 件)、鰭脚類はゴマフアザラシ(8 件)であった。鯨類で 2 頭を超えるマスストランディングは発生しなかった。鯨類のストランディングのうち、発見時生存例はヒゲクジラ類が 0 件、ハクジラ類は 25 件（12.8%）であった。生存例のうち 13 件で救助活動が行われ（生存例の 52.0%）、救助成功例は 6 件（一部個体の生存・自力脱出を含む、救助例の 46.2%）であった。8 月 1 日に北海道苫小牧に漂着したコククジラの調査には、日鯨研、国立科博、北大の他、日本セトロロジー研究会会員が多く参加した。

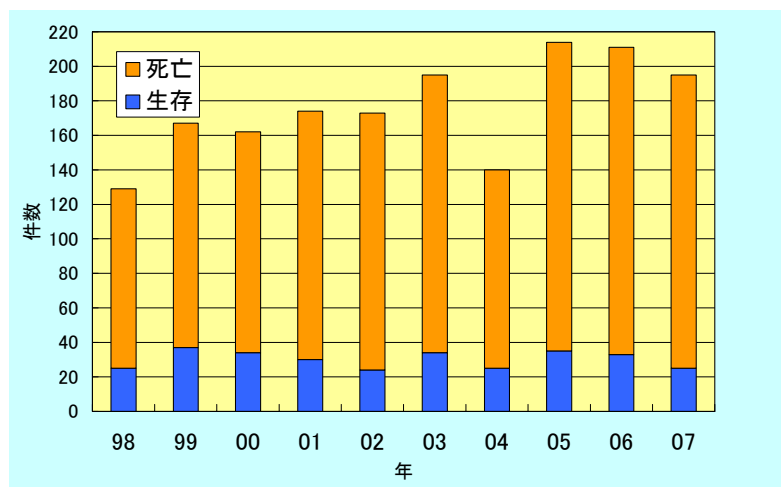


図 1. 過去 10 年の、日本沿岸におけるストランディングレコード（鯨類）の
年別報告件数（混獲を含まず）

P 9 日本沿岸に漂着した海棲哺乳類の病理学的調査報告

2007.1-12.31

○田島木綿子（国立科学博物館）、石川創（〔財〕日本鯨類研究所）、真柄真実（鳥取大学）、鈴木タ紀（日本セトロロジー研究会）、山田格（国立科学博物館）

A report of pathological investigation about marine mammals stranded on the coasts of Japan during Jan. to Dec. in 2007

Yuko Tajima (National Museum of Nature and Science), Hajime Ishikawa (Institute of Cetacean Research), Manami Makara (Tottori University), Yuki Suzuki (AOI Environmental Consulting), and Tadasu K. Yamada (National Museum of Nature and Science)

国立科学博物館では日本沿岸に漂着する海棲哺乳類の体制的な調査を継続的に実施している。漂着個体の発見情報および調査活動はセト研会員からの多大なる協力により実現可能となったものが多い。今回も過去 6 回の大会にならい、演者らは 2007 年に実施した調査の中から、病理学的調査について報告する。この調査により漂着海棲哺乳類の死因の解明、生前の健康状態の評価を目指している。

セト研漂着専門委員会の報告によると（石川, 2008）、2007 年の日本沿岸の漂着、迷入記録は鯨類で 211 件、鰭脚類は 16 件であり、混獲は 181 件であった。同期間に病理解剖を実施した個体は 33 例（ヒゲクジラ類：コククジラ、ニタリクジラ各 1 例、歯クジラ類：スナメリ 16 例、カマイルカ 4 例、ハナゴンドウ、オガワコマッコウ、イシイルカ各 2 例ハセイルカ、マッコウクジラ、ネズミイルカ、アカボウクジラ、オウギハクジラ各 1 例）であった。海域別には日本海 7 例、太平洋 9 例、瀬戸内海 5 例、東シナ海 6 例、豊後水道 6 例であった。病理所見の信頼度が高い（新鮮）個体は 14 例（42%）、死亡原因が特定できた個体は 16 例（48%）であった。

死亡原因の内訳は重度の寄生虫性肺炎 3 例、敗血症 2 例、動脈硬化症、急性出血性膵炎および河川迷入による浸透圧調整不全ならびに衰弱各 1 例と病理学的に重要な症例を多く経験した。この他には混獲・事故 5 例、新生児 2 例および外敵（サメ）による咬傷ならびに急性の循環不全 1 例を経験した。大型鯨類の場合、病理調査は腐敗の進行との戦いになるが、2007 年に経験したニタリクジラおよびコククジラは、それぞれ 5 月、8 月という比較的暖かい季節に起こったことも重なり、残念ながら発見時すでに腐敗の進行が激しく、詳細な病理学的調査を実施することはできなかった。しかし、両個体ともに全身骨格標本をはじめとした生物学データを多岐にわたり収集、記録することができたことは大変意義深い。2007 年に調査件数の多かったスナメリは、本来の棲息海域であるが今まで漂着報告件数の少なかった長崎県、大分県、兵庫県、大阪府および宮城県において、自治体、水族館、大学を含む協力者による体制が整ったお陰であり、生物学的にも大変貴重なデータの蓄積が継続されている。と同時に、スナメリでの重度な寄生虫性肺炎は昨年に続き今年も 16 例中 3 例（19%）に認められた。今後もデータを増やし、これが何を意味しているのかを明らかにしていきたい。

P10 写真で見るセト研創立 20 年史—研究大会を中心に

○佐野修（石川県立自然史資料館），箕輪一博（柏崎博物館），平口哲夫（金沢医科大学），セト研第 19 回実行委員会

The photography exhibition for the 20th anniversary of the Cetology Study Group of Japan, with a focus on the annual meetings

Osamu Sano (Ishikawa Museum of Natural History), Kazuhiro Minowa (Kashiwazaki Museum), Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University), and the Executive Committee of the 19th Annual Meeting of the Cetology Study Group of Japan

本研究会は、金沢大学名誉教授の山田致知先生を代表として、39名の会員をもって日本海セトロジー研究グループとしてスタートした。初舞台は、1988年12月2日～4日の3日間に渡って、能登半島で開催されたシンポジウム「日本海と鯨類」（夢半島のと推進委員会主催）における主管の役であった。きっかけは山田先生が98年3月に「能登でイルカに似た鯨が水揚げ」という北國新聞の報道をご覧になり、写真からその鯨をオウギハクジラと看破。そしてこの年、相次いで能登に漂着したオウギハクジラを確認していくこととなった。当時、珍しいとされていたオウギハクジラの漂着個体はもちろんのこと、ほかの鯨類に関する情報も日本海沿岸には乏しかった。研究者や市民を巻きこんだネットワーク作りが必要と考え始めていた山田先生を後押しするためのシンポジウムでもあった。

2008年の本大会は20周年の記念すべき大会といえる。そこで我々は、毎年開催されてきた研究大会の写真記録を集め、20年の歴史を振り返ってみた。

第1回研究会は1990年、金沢市で開かれ、当時の会員数45名中35名が参加した。参加率は77%の高率であり、研究会の必要性が立証された。以後、魚津市、上越市など会員の多い北信越で研究会が開かれた。第8回は福井県の三国町で開催され、その年の1月に漂着した生々しいナホトカ号の船首と重油の爪あとを見学した。この頃、会員は全国に広がり、参加会員の旅費軽減のために北信越で開催するという意味が無くなった。開催地を全国に広げることになり、第9回は福岡市のマリンワールド海の中道で開催、参加者はついに100名を越えた。以後、佐渡、東京、鳥取、函館、宮崎などで開催されている。この間に、団体の名も日本海セトロジー研究グループから日本海セトロジー研究会に、そして現在の日本セトロジー研究会に発展している。

過去18回の研究大会の写真記録が思い起こしてくれる事は多い。この展示がセト研の将来構想に役立つことを願ってやまない。

なお、本会顧問の本間義治新潟大学名誉教授が第1回研究会から第19回大会まで皆出席、皆発表および会誌「日本セトロジー研究」の全号への投稿を“20年間の大偉業”として称え、さらなる記録更新を期待したい。